

## 岡本韋庵『亜細亜之存亡』について

はじめに

本書は岡本韋庵が明治三三年に哲学書院より出版したもので、「亜細亜之存亡」「亜細亜之存亡附録」「世界工業之近勢・支那大陸之富源」の三篇より構成されている。本稿はこのうちの「亜細亜之存亡」に述べられた思想を紹介し、かつ原文に註を付して提示するものである。なお三番目の「世界工業之近勢・支那大陸之富源」は、岡本が日本新聞（三六四〇号・筆者不明）の記事を転載したものであり、「亜細亜之存亡附録」はその序文に相当する。本稿ではともに省略した。

### 『亜細亜之存亡』の主張

「亜細亜の存亡は今日にあり」で始まる本書において展開される岡本の主張に耳を傾けようとする際、我々は本書が日清（明治二七）・日露（明治三七）両戦争の間に

有馬 卓也

書かれたものであるという「今日」が持つ意味を十分に考慮せねばならない。すなわち、日清戦争に勝利し、アジアにおける地盤を確実にしたものの、三国干渉という西欧列強の圧力に屈した日本が、あからさまに南下政策を推し進めるロシア対策を苦慮する状況下に生み出された著作であるということである。加えて幕末から維新期にかけて五回にわたって樺太探索を行い、樺太を侵食するロシアを目の当たりにした岡本の実体験も見逃せない（註）。このことは、この著作の『亜細亜之存亡』という名が、アジアの盟主たる日本という自意識の上に付けられたものであることも、その一証となる。これはロシアを中心とする西欧列強に対する危機意識を喚起すると同時に、逆に西欧思想に心酔して東洋的美を喪失し、国粹（国の最もよい所・美点）に目を向けようとしないう若者たちへ向けられたメッセージでもあらう。まさに当時の岡本の意識は所謂内憂外患に他ならなかった。

さらに言えば、以前拙稿「岡本韋庵のメッセージ」（註

2)において筆者は「岡本の著作は」一見雑多なようでも一本の線で結ばれている」と述べたが、本書はそれまでの岡本の著作(註3)の集大成的性質をも持つ。いくつか例示しよう。

たとえば欧米の実学を形而下、東洋の道德の学を形而上とし、西洋風の実学・知育を偏重する維新以来の風潮を否定する次のような文がある。

「泰西人が物理・器械・技芸に長じたるは、已に聖域に達すともいふべきほどにて、一も間然すべきに非ざれど、形而上なる道学に至りては、経験もなく、習練もなく、稚童の域に徘徊するが如き者あり」(V)

これは『岡本子』(明治二年・岡本氏蔵版)などを始めとして岡本が常に主張していることであつた。

また、次の日本における君臣・父子の關係、君主と人民の關係などを論ずる文は、明らかに教育勅語を念頭に置いた発言であり、教育勅語について多くの著作を遺す岡本の根幹を為す思想であらう。

「父子の道は、君臣の道に外ならず。之を樹木に譬ふれば、根ありて幹あるが如し。父子は根なり、君臣は幹なり。根ありて幹なき者、争<sup>いかで</sup>か樹木と称するを得ん」

(I)

「臣民たるものは法律を守り道德に従ひて、互に相保

安するを、君に事<sup>つか</sup>ふるの忠義を心得て、一日も忘るべらざるは……。子の父に事<sup>つか</sup>へ、婦の夫に従ひ、弟の兄に従ふも、君道の上より言へば均しく忠なり」(VI)

次に、欧米列強に翻弄され続ける中国(清)の政治改革案を述べる部分の冒頭に、

「余嘗て漢土のため熟思するに、孔子を立てて、即真文宣皇帝とし、夫子の子孫をして帝位に即き、万世に伝へて變ずることなきものとし……」(VII)

とあるが、これは中国旅行記『支那遊記』(写本)の明治九年一〇月二十九日の条に

「千秋の後に至りて、中国に君臨すべき者は、以て至聖の裔ならん。……今より後、中国の政を為すは、唐虞以来の帝王の裔の上議院、天下の道術ありて志を得ざる者の下議院を互角にして、合衆協同して、斯の民を仁寿の域に躋<sup>のぼ</sup>らしむべし」

とあり、岡本が明治九年の段階で既に論じていたものである。これは日本の天皇を中心とした政治システムを、中国では孔子の血脈を中心としたものに転用しようという考えである。

さらに、全ての国が軍備を放棄し、「天討府」という世界諸国家の鎮圧軍を設けるというプラン(VI)は『万国史記』(明治二一・岡本氏蔵版)・『鉄鞭』(明治三四・上

海商務印書館)に言及済みである。

次は国策の誤りが道德の頹廢を招くとする一文である。「凡そ政治・經濟・諸科の學を主張するに、忠孝仁義の徳を外にして、得失利害を爭論し、紛々擾々として新奇を誇るが如きは、反りて國家の亂敗を讓すものに非ざるはなし。蓋し學の道義に本づかざるものは、必ず目的を勢力に取るがため、才智漸く長ずるに随ひ、種々の奸計を運して金銀を私することに注意し、刑憲に触れざる已上は公然たる盜賊となるを耻ぢず。意氣揚々と肥馬を驅り高帽を戴きて街衢を横行するを一生の愉快とし、婦人・小童・惡漢・黠兒の輩をして、艶羨欽慕し、嘖々と嗟賞して已まざらしむ」(Ⅱ)

道德(德育)輕視の風潮が國家の敗亂と若者の頹廢を招いたとする論は隨所に見られるものであるが、教育勅語成立との關連から、とりわけ『越山先生伝』(明治二九・岡本氏増版)などにおいてよく見られる。

この外、キリスト(耶穌)教を「妖怪惡魔の巨魁」「妖魔」「毒」(以上Ⅰ)として排斥する思想は『耶穌新論』(明治二六年・哲學書院)において既に詳細に論じられているし、また「堯舜孔子をして我が國体の此の如くなるを見せしめば、必ず取りて法とし、四海萬國に施して億兆を安んぜんとするなるべし」(Ⅰ)という天皇を中心とし

た國体を至上とする考え方は、全著作を通貫する信念であり、本書もそれからはずれないことの証明である。この外、細部に散見される集大成的要素は枚挙に暇がない。では以下簡単に「亜細亞の存亡は、今日に在り。我が大日本國の存亡も、今日に在らんとす」という衝動的な一文で始まる本書の内容を紹介しておこう。

岡本がこの日本を含むアジアの存亡が今日にあるとする最大の理由は、欧米から輸入された社會平等・自由平權の精神にあるとする。なぜ社會平等・自由平權が日本・アジアに惡弊をもたらずのか。岡本はこの構造を解き明かすべく、日本のあるべき姿と日本の現状、中國のあるべき姿と中國の現状、そして兩國の今後の政策のあり方、さらには社會平等・自由平權を生んだ西歐の歴史と現状、そしてロシアという國家の驚異、といった視点から日本・アジアの危機的状況を解説していく。

Ⅰではまず上記の問題提起をし、その上で中國における君臣の分・道義などについて触れ、さらにそれを受けた日本の体制について述べる。ただし、日本の君臣關係は皇統綿々と続き、中國の堯舜ですら手本にできるようなものであったとする。そして、アジア全体の体制を總括し、アジアの理想的状态からかけ離れた現状を説く。

Ⅱでは日本の長所としての忠孝仁義に触れ、それが西

洋の邪説を奉じるがために失われつつある現状について述べている。とりわけ「祖宗忠厚の風を「迂闊」とし、「孔孟仁義の学」を「固陋」とする風潮を「風俗敗乱」とし、改めて「我国の存亡は今日に在り」と言う。

Ⅲでは人権同等の弊害について、日本と欧米の例を挙げつつ述べている。国民に智愚の差があることはやむを得ないことであつて、ここに人権同等を導入するには問題があると述べる。

Ⅳでは社会平権の説について。もともとこの説は困窮する貧民もしくは志を当世に得ざる者から出たものであつて、つまり権利を得られない者が、富人をうらやんで出したものであり、これでは為し難いとする。そして、真の平権は忠孝仁義の精神が行きとどいた道德的社会的上にこそ成立するのであつて、現在の日本はそれに逆行していると言う。

Ⅴでは衰退していく忠孝仁義について。現在の文明諸国は金銭のみを崇拜しており、忠孝仁義の精神はないとする。これらの諸国家は形而下のこと（物理・器械・技芸）には通じていても、形而上のこと（道学）については未熟であるとし、決して模範とするに足りないことを説く。

Ⅵでは社会平権説を唱える前に、諸国家が所有してい

る兵力を放棄すべきことを説く。諸国家は兵力を持たず、各地に「天討府」を設け、公法に従つた兵力を發動すべきであるとする。また、あるべき理想的国家における君臣関係、とりわけ宰相をはじめとする臣下の在り方について述べている。

Ⅶでは、まず中国の今日の形勢について述べる。中国こそは日本にとつて最も重要な国であることを示した上で、その政治体制についての提言がおこなわれている。さらに、欧米で行われている「総管（君主に代わつて君主の及ばない所を助ける者）の制」は、君主の道德の高さが基盤となるのであつて、決して君主の身分が貴いことは基盤とはならないことを述べる。

—註—

（Ⅰ）以上の点については、拙稿「岡本韋庵のメッセージ」（徳島大学国語国文学17）において論じた。また加筆修正したものを阿波学会・岡本韋庵調査研究委員会『アジアへのまなざし岡本韋庵』（阿波学会・二〇〇四）第一章第三節に再録。

（Ⅱ）註（Ⅰ）既出論文。

（Ⅲ）註（Ⅰ）既出書の第一章第二節において、岡本の著作の解題を行つてゐる。参照されたい。

\* 本稿における『亜細亜之存亡』の入力作業は本学大学院修了生坂下文香氏が行つた。

## 『亜細亜之存亡』訳註

### 凡例

- 一、国立国会図書館所蔵のものを底本とした。
- 一、本書は漢字・片仮名交じり文で書かれているが、漢字・平仮名交じり文に改めた。
- 一、文中漢文で表記されている場合は書き下して原文を註記した。
- 一、本文はすべて読点のみで表記されている。句点・読点に改めた。
- 一、本文に濁点が賦されていない場合は付して表記した。
- 一、誤字・脱字がある場合は訂正して註記した。
- 一、旧字・俗字は新字に改めた。
- 一、本文は全部で七つの段落から構成されている。本訳註ではそれをⅠ～Ⅶとし、さらに適宜改行した。
- 一、各段落ごとに註を付した。

### I

亜細亜の存亡は、今日に在り。我が大日本国の存亡も、今日に在らんとす。何もて然りといふや。其説は一にして足らざるも、社会平権・人身同等の説より甚しきはなし。是は君父を凌蔑し、忠孝を抹殺するものたり。焉<sup>いづくん</sup>。

ぞ同胞兄弟なりといひて、一日も寛恕し其罪を問はざるを得ん。焉<sup>いづくん</sup>ぞ外客の感情を悪くせんといひて、徒<sup>いたづら</sup>に過慮し汗漫<sup>いづくん</sup>(註Ⅰ)に附するを得ん。

余思ふに漢土は古より君臣の分<sup>ぶん</sup>に、道義に本づきて教を敷き、永く斯<sup>この</sup>民を保護するを目的とし、堯舜の禪讓(註Ⅱ)あるに当りても、「四海は困窮せば、天禄永く終らん(註Ⅲ)」といひて、深く人主の横暴を戒め、湯武の征誅(註Ⅳ)を果せるに当りても、「允<sup>まこと</sup>に聡明なるは元后と為す(註Ⅴ)」といひて、睿聖仁慈なるものならでは、其任に当るべからざるを示されたれど、堯舜湯武の如き聖賢人は、常に得がたく、君位を争ひ私慾<sup>はしいま</sup>を肆<sup>はたら</sup>にする害の窮りなきを知るがため、大徳あるものの子孫を立てて、其位に在らしめ、全国一般に之を奉戴して、一日も永く保続することに務め、乱臣賊子が覬覦<sup>きんぐん</sup>(註Ⅵ)の念を抱くことを容<sup>ゆる</sup>さざるを以て万世不易の大典とせり。蓋し人主が道義の大権を掌握するを、刑賞の大権を掌握すると一致に帰したる者にて、其間に少しく不度の君主あるも、妄<sup>みだり</sup>に其過を問はず、臣民相与に諫争して之を制止し、勢の為すべからざるに至るも、君を棄てて逃散するに忍びざるを風習とし、革命相続して已まざるも、此心を放失せざるを以て纘<sup>むす</sup>に国を成し人民を鳩集<sup>きうしふ</sup>(註Ⅶ)して、各<sup>おの</sup>其堵に安んぜしめたりけり。人民各自の欲する所に任せて、

道義に安んずる者とせば、焉いづくんぞ聖賢人の苦慮を要せんや。聖賢の寡慾にして深智なる、焉いづくんぞ好みて人の上に立つことを為さんや。

我国は天壤無窮の神勅註8ありてより、皇統綿々として終古に變ずることなし。是は漢土聖人が企て及ばざる所たり。祖宗の深仁厚沢に非ずば、争いかでか然ることを得ん。祖宗の精神に対して、堯舜孔子の異議あるべからざるは、言ふも更なり。堯舜孔子をして我が国体の此の如くなるを見せしめば、必ず取りて法とし、四海万国に施して億兆を安んぜんとするなるべし。

是もて言ふに、亜細亜君主の淵源は、道義もて人民を保護し、各自に安堵せしめんとするに外ならず。此任は真に道義なくては当るべきならざれど、道義の果して斯民を保護するに足るべきものは、漢土は論なく、我国の如きも、常に其人に乏しく、縦たとひ其人ありとするも、子孫として祖宗に勝つこと能はざるは、自然の人情なり。子孫の愈いよいよ遠くなるに随ひ、愈いよいよ疎くなる勢となり、其人の一身なる道義は、いかに盛なりとするも、一家より一村に及ぼし、一郷一県より天下に及ぼし、世をして齊ひとしく感服せしめんは、百年の身に余りあることにて、満天下の骨髓に滲しみたる祖宗の道義に勝たんとするは、決して企て及ぶべからざる所なりといはざるを得ず。是は

吾曹が常に篤く信じ、安心立命の地として疑はず。我が大日本国に生れ、生人の皮を被りたる以上は、斯いかくなかるべからずと覚悟したる所以なり。且つ註9父子の道は、君臣の道に外ならず。之を樹木に譬ふれば、根ありて幹あるが如し。父子は根なり、君臣は幹なり。根ありて幹なき者、争いかでか樹木と称するを得ん。父子にして易かふべからずとせば、君臣も易かふべからず。君臣あらざれば、父子あることを得ざるに至らんこと必せり。凡そ人の家には、必ず父兄の衆子弟を指麾する者あり。泰西の風を主張して、二十以上に至れば、妻を得て別家すべきがため、父の指麾を要せずと説くものなどあるべけれど、二十に達せざる兒女の教養をば何とか謂はん。東洋人が天性の孝順なるに随ふが如きは、父子別居するを欲せざるもの多し。異姓に娶りて父子夫婦同居せんには、父母命令の下に安んぜらんと欲するも得んや。一家より進みて九族となれば、宗子あり。更に進みて一村となれば、村長あり。宗子村長は父の一家の主となりて、子孫を教育し、整飾すると齊ひとしき任もて、衆を統御し、私を去り公に就きて、各自の分を守り、相害することなく、相安んぜしむるものたり。更に進みて一郡一県に至り、長を立て其を保護せしむるも、一家一郷と同じく、自然の勢にして、必ず避くべからざるものたり。斯いかく層累したる上に帝王

あり。帝王は万民に代りて、万民を保護す。国家の国家たる体面を表し、万民道德の大淵源となること、亜細亜全体の人心世道たり。泰西諸國は、古より暴横人主の多く相續し劫奪圧制の風習なるがため、否と評するものもあらんか。

今日平權説の行はるるは、漸く君相註の压制を脱したる結果にて、彼邦庶民のために深く賀すべき所なれど、君相を暴悪なるものと認め、故意に抗拒し、飽くまでに追討せんとし、道義を上帝の権内に存して、生人の関知する所に非ずとし、一振作(註)の間にして、上帝の籠絡(註)中に入らしめんと企つるが如きは、謂ゆる枉れるを矯めて直きに過ぐといふものなり。欧米の慣習にても、貧富相克ち戦乱相因るの禍を免れざることを必せり。況んや義士聖人が、人主の本質を道義に資れるに於てをや。況や我国列聖が仁儉の大徳を数千年に実行したまへるに於てをや。昌黎(註)の韓子が語に「天の人に授くるに聖賢才能を以てするは、自ら余りあらしむるのみならじ。其足らざるものを補はしめんと欲してなり。耳は聞くことを司りて是非を聴き、目は見ることを司りて險易註を視るにより、身の安きを得るが如し。聖賢は時人の耳目なり。時人は聖賢の身なり」といへるは、生人の道義に於て実に然らざるを得ざる所たり。苟も人に智愚賢不

肖ありて、愚不肖は賢智の指導に従ふべく、賢智は愚不肖を肢体として、十分に保護せざるべからざる道理なるを知らば、平權説の愚民を煽惑する(註)に止まり、反りて不仁の結果に陥るものたるをも知らるべきなり。人主が政治法律の大主権あるは、道德の大本に於て侵すべからざるものなるがためのみ。是固に四海人情の同じく然るにより出来たる者にて、蜂蟻に君臣上下の義あると均きものゆえ、遼古註の初より今日に至るまで、生民の群居する処には、如何なる野蠻といへども、此事実あらざるはなし。其制は種々異同ありといへど、一般に上下を弁じ、命令を嚴にしたるものなり。何の会社といひ、学舎などといふも、均く上下を弁じ、命令を施し、互に相利して永久に保存するの目的を立てたり。是豈道義の実存する所に非ずや。

然るに今や、盛に兼愛の説(註)を持し、四海人民を同一兄弟なりとし、各人同等の権を主張して、君相に容れしめざるを、文明日新の勢にして、四海五洲の齊く違ふべからざる所なりと固執するものあるが如し。君臣上下弁などあるは、天地自然の公道に非ず。父子の道とは全く各別なり。父子は自然なれど、君臣は压制に出でて、人情に戻れり。往古より勢の強きに敵しがたくて出来たる事情なれば、不便を感じる儘に、変更するが当

然なりとし、堯舜孔子を陋習<sup>註18</sup>なりとし、甚きは祖宗をも輕議する者あるを聞けり。斯る偏見を喋々する(註19)より、世に順逆の標準とすべきものなく、道義に於て帰着する所あるを得ざれば、不正不義は却て俗論のため嘉賞せられ、世をして貪暴無耻を称して能幹人物とし、放縱無礼を目して磊落男子とするに至りて、文明の実を此に在りとす。彼輩が妄見に拠れば、斯る世態にて経過しつつ、一国を挙りて聖賢人の出でん者と断定したるが如し。物の齊<sup>ひとし</sup>からざるは物の情なり。天地を竟ふるに至るも、争<sup>い</sup>か斯る実況あるを得ん。此説は、元來耶蘇<sup>註20</sup>が暴政に抗抵し、貧弱の民を救はんと欲して成らず、死刑に処せられたるを、其徒の深く慙<sup>あはれ</sup>みて、種々の説を捏造<sup>ねつぞう</sup>し、愚民を鼓舞したるに出でて、耶蘇は湯武の如き志なりとせば、善人たるに相違なしと雖も、身分の湯武に異なるを奈<sup>いか</sup>にせん。門徒の附会<sup>はうまい</sup>を肆<sup>ま</sup>にせしは、耶蘇の賞する所なりや否や。彼が如きを耶蘇の真意なりとせば、耶蘇を併せて妖怪惡魔の巨魁なりといはざるを得ざるなり。理論は中庸を要するも、常に一方に偏<sup>や</sup>じ易きを患ふ。況や最初より詭激に涉り私党を樹<sup>たか</sup>つるものをや。泰西各国の耶蘇を信ずるは、漢土四億万人の関羽<sup>註21</sup>を信ずると異なることなし。関帝は害なきも、耶氏は毒甚し。嫉妬云々の説を、上帝が仁心の余りなどいふが

如きは、全く梵天教・馬何默教<sup>マホメット</sup>註22と、同じく小人の姦黠<sup>註23</sup>を極めたるものなり。平権自由などいはば、祖宗が安平の訓にも合ひ、孔子が仁義の教にも違はざるに似たれども、私意に出でて疾惡の念を忘ること能はざるものなれば、徒<sup>いたづら</sup>に口実と為して、四海の不平漢を煽動する結果あらんのみ。欧米古今戦乱の事実に徴しても見るべきなり。焉<sup>いづくん</sup>ぞ君子にして禍福のために屈せず、智者にして理を見ること明なるものの心を感服せしむることを得ん。富蘭格林<sup>フランクリン</sup>註24が宗教改革説の如きは、儒者に近く頗<sup>すこぶ</sup>る中正なるものにて、東洋人も従はざるを得ざる所あれど、富氏は彼国愚民の迷信を挽回しがたきを奈ともすること(註25)能はざりしなるべし。彼国愚民に其信ずる所を主張して、富氏に向ひ必ず汝が説を変じて古説に従へといはしめば可ならんか。断じて其の不可なるを知るなり。古語にも人心の齊<sup>ひとし</sup>からざる面の如しといへり。面の如くに同じからざるは、常に調和しがたき所以なり。我国なる耶教の徒が、迷信の説もて国人を感服せしめんとするも、彼が骨肉兄弟を始として与<sup>よ</sup>せざるもの多きを奈<sup>いか</sup>にせん。従<sup>したが</sup>ひ一家感服すとも、一郷一県の感服せざるを奈<sup>いか</sup>にせん。況や天下の人に於てをや。孝弟の道は各人の固有に出でて、何人も心服せざるを得ざる所なるすら、舜の大孝にして天子の位に在るならでは、天下



の父子たるものを定むること能はず。一己の私見を持して天下を易<sup>か</sup>へんとするは、何たる妄想ぞや。斯<sup>か</sup>る妄想は何の目的ありて然るや。彼は父子の道を云々といふなれど、無上至尊としたるには非ず。父母の上に尤も尊信すべしとするものは、妖怪惡魔の愚民を恐嚇するものなること必せり。人は父母なくば斯<sup>この</sup>身なし。生の初に当りて斯<sup>か</sup>る怪物あるを記せざるも、父母は暫時も離れ去るべからず。安<sup>なん</sup>ぞ妖怪と同視するを得ん。況や妖魔がため跋扈せられて、父母を後にすることを得んや。思ふに彼は後生の説を持し、死後に至り天堂に会合するの樂みあるを妄信し、人間の大利を醸<sup>か</sup>すことを忘れたるなるべし。斯<sup>か</sup>の説の日に盛なるは、亜細亜聖賢の政教に反し、世道を顛覆<sup>てんぷく</sup>するものにて、古来なる乱臣賊子の再生し兇<sup>きよう</sup>焰<sup>えん</sup>(註26)を逞<sup>たくまし</sup>くするものと決定すべきのみ。亜細亜の存亡を今日に在りといはざるを得ざる所以なり。

—註—

- (1) 行いにしまりのないさま。
- (2) 中国古代の聖天子である堯と舜が行った、天子が位を血縁外の有徳者に譲るといふ王位継承をさす。堯は舜へ、舜は禹へ禪譲を行った。
- (3) 『尚書』大禹謨に「四海は困窮せば、天禄永く終らん」とある。
- (4) 中国古代の殷の湯王と周の武王。ともに前王朝の桀と紂を武力革命で倒し新王朝を建てた。

(5) 『尚書』泰誓上に「竄<sup>まこと</sup>にして聰明なれば元后と為り、元后、民の父母と作る」とある。

(6) 身分にはずれたことをうかがい望むこと。

(7) 集めること。

(8) 『日本書紀』巻二に見える天照大神が瓊瓊杵尊を葦原中<sup>なかつく</sup>國に降臨させた際に賜った神勅。「葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ吾子孫の王たるべき地なり。爾皇孫就<sup>います</sup>てまして治せ。行<sup>さきく</sup>矣。宝<sup>あまのひつぎ</sup>。祚<sup>あまのつぎ</sup>の隆えまさむこと、當に天壤と窮<sup>あめつち</sup>りなけむ。」

(9) 原文は「へ」に作るが「つ」に改めた。

(10) 君主と宰相のこと。

(11) ふるいおこすこと。

(12) 言いくるめて自分の手の内にまるめこむこと。

(13) 中唐の文人韓愈(字は退之)のこと。河南省昌黎に生まれたのであるように呼ばれる。引用の文は「争臣論」より。

(14) ここでは危険と安全の意。

(15) おだてて惑わすこと。

(16) 太古のこと。

(17) もともとは春秋時代の墨家が主張したテーゼを示す言葉であるが、ここではキリスト教の博愛の主張をさす。

(18) 下品な風俗のこと。

(19) 口数多くしゃべること。

(20) 一六世紀にイグナティウス・ロヨラが設立したカトリック教会に属

するイエズス会をさす。とりわけアジアへの布教に貢献した。

(21) 三国時代の劉備(蜀)に仕えた武將。勇名をはせ、後世神格化され、關帝と呼ばれた。

(22) ヒンズー教とイスラム教のこと。

(23) よこしまで悪賢いこと。

(24) ベンジャミン・フランクリンのことか。リチャード・ソーランドズの名前で出版した『貧しきリチャードの暦』は一般市民に勤勉と節約の教訓を諷風に説いたものである。また、政治家としてアメリカ独立に尽力している。

(25) 原文は「ことすること」に作るが「ともすること」に改めた。

(26) 凶悪な氣勢のこと。

## II

忠孝仁義の精神は、法律・政治・経済・兵備等の大基本にして、古より我国の長所なるは、今日に於ても、東西各国の均しく賞揚する所なれど、邪教を迷信するに至りては、和氣清磨(註1)・楠正成(註2)等が正統子孫も、決して之を是認すること能はざるべし。現に程朱學者の子孫にして、邪説を奉じ、父祖の教に従はざる者あるを聞けり。況や道義の素養なく、浮萍の泛々たる(註3)が如き末學者に於てをや。邪徒が小信小義に心酔して、国家の大計を誤ることを知らず、甚きは広衆の前に

在て、君父に無礼を加へ、傲然として顧みず、国家の安寧を妨害するに至り、人をして、髪を抜きて誅するも余罪あるが如き感を懷かしむ。勝て歎ずべけんや。凡そ政治・経済・諸科の学を主張するに、忠孝仁義の徳を外にして、得失利害を争論し、紛々擾々として新奇を誇るが如きは、反りて国家の乱敗を醸す(註4)ものに非ざるはなし。蓋し学の道義に本づかざるものは、必ず目的を勢力に取るがため、才智漸く長ずるに随ひ、種々の奸計を運して金銀を私することに注意し、刑憲に触れざる已上は公然たる盜賊となるを耻ぢず。意気揚々と肥馬を驅り高帽を戴(註5)きて街衢を横行するを一生の愉快とし、婦人・小童・惡漢・黠兒(註6)の輩をして、艶羨欽慕し、嘖々(註7)と嗟賞(註8)して已まざらしむ。斯る陋風の都鄙(註9)に充満しぬるは、全く亡国の実況なりといはざるを得ざるなり。果して然らば、之れを救ふには、道義の大槩を投ぜず(註10)あるべからず。君道を明にし、上より率先するに非ずば、争か(註11)挽回することを得ん。西洋諸物の輸入するを見て、黒白を判定するの力なく、自ら奴隸となりて崇拜し、強ひて摸倣し、彼は聖なり賢なりと呼び、彼が批評しかねたる、祖宗忠厚の風を迂闊なりとし、孔孟仁義の学を固陋なりとし、富者は貧者を凌ぎ、貧者は富者を嫉み、老人は少年を輕薄視し、少年は

老人を頑固視し、徒に罵詈を逞くし、讒謗註12を極めて、各人各自に分立しつつ、耳を平權自由の説に傾くとせば、国家の前途を奈にせんや。

邪教の徒は、貴賤親疏の分を立つることを欲せず、四海人を同胞兄弟なりとし、公平に兼愛するを主義とし、頭腦中に謂ゆる上帝の侵侮すべからざるものを存すといへども、彼が鑒定(註13)したる上帝は、決して其実あるに非ず。実は妄想中の怪物にて、昏迷せる浮氣に過ぎざれば、天地万物の大原本体となり、至誠にして息むことなく、彼此感通して、生々活潑たるものに非ざるがため、決して威恩賞罰の自己身上に關涉するものあるべき筈ならず。永々万世に何の消息もなく、醉生夢死の実境に沈淪したるものゆえ、其帰する所を要すれば極端なる一己独擅の主義たらざるを得ず。神聖の信徒なりと称して、乱臣賊子の巨魁たらざるを免れざるなり。蓋し謂ゆる上帝といふものに対し、道理の目的として事ふべきものなり。専ら迷信もて一心に注想し、生人の本領天分たる忠孝仁義の説の如きは、之を塵埃糟粕註14に附して、齒牙に掛くることを欲せず。或は一二の評論を下すものあるも、必ず君父を後にせんとし、天誅の其身に及ばざるを幸に、敢て妄信の説を逞くし、毫も忌憚する所なければなり。斯る輩の日に多きが上に、輕薄男子・無賴少

年が、群を成して權勢名譽に狂奔し、此輩と合して凶焰を張り、奸曲を肆にし、左手に親旧を溝壑に擠して、右手に大河を倒持するを知らざるが如きものあり。風俗を敗乱し国家を荼毒(註15)する、此より甚きはなし。是豈我國の存亡を今日に在りといはざるを得んや。

—註—

(1) 七三三〜七九。奈良末から平安初期の高官。道鏡が皇位につこうとした際、宇佐八幡宮の神託を受けて道鏡の野心を挫いた。

(2) 楠木正成。一二九四〜一三三六。鎌倉末から南北朝時代の武将。後醍醐天皇の鎌倉幕府討伐の計画に呼応し、建武の中興に貢献した。

(3) 浮き草(浮萍)が浮かびただようさま。

(4) 原文は「国家を敗乱を讓す」に作るが「国家の敗乱を讓す」に改めた。

(5) 原文は「載」に作るが「載」に改めた。

(6) 悪賢い者のこと。

(7) 大声で言い争うこと。

(8) 感歎してほめたたえること。

(9) 都会と田舎。全国の意。

(10) 原文は「投せず」に作るが「投せず」に改めた。

(11) 原文は「が」に作るが「か」に改めた。

(12) そしること。

(13) 善悪・真偽・優劣などを見定めること。

(14) ちり・ほこりと酒粕。つまらないもののためとえ。

(15) 苦しめる、害する。

### III

今日人権同等の説を持し、各人の自由を喋々するものは、邪教の徒が、困窮人・薄命者・落魄生・不平漢等と呼ばれて兄弟なりとしたるが根となり、彼国哲学者流が邪徒を攻撃したる説に對し、種々なる回護説を為し、功利に奔逐して、各自の欲する所を肆にせんとするの人情を察し、英人が自利の説など流行するを見て、教説を其と合するやうに工夫し、教祖を尊信するの余威を、世界に逞くせんとするに外ならず。

我国は古より忠勇慷慨の士(註1)に富みたること、万国に卓越して、権姦大賊を一刀の下に斃し、烈日秋霜(註2)の節を表するに、他人を連累せしめざる風あり。国家元氣の存する所といはざるを得ざるものなりしが、近年に至り、青年の壯士と称するものあり。此輩は一時の氣概あるものに似たれども、多くは恒産(註3)なき無頼漢にて、邪教の説を妄信するものならんと思はるるなり。縦ひ邪説を信するものに非ずとするも、邪説の盛に行はるるより出でたる弊害なり。此輩は切齒扼腕して、民権を唱へ国権を説き、悲憤歎息して、死を視ること鴻毛より輕き

が如くなれど、実は腕力もて他人を圧制するを主とし、腕力は金力のため左右せられたるなり。是は泰西人が人権不平なる間に生れ、平権を求むる風俗制度なる余習の伝染したるにて、其源は教徒が各国君主の暴悪なるに抗し、社会平権の説を唱へたるに出でて、独立自主などと称するも、金力は第一となり、腕力は其次に在り、道義は最下に在るものなり。試に彼輩をして政を為さしめば、必ず君主を度外にし、政府を顛覆して、万民共和の政制を敷くべし。

米利堅は英に叛きたる国にて、眞の主と仰ぐべきものなく、大統領を立つるに便なるをもて其制となりしも、大統領以下諸員が、人民に媚ぶるの弊は漸く甚しく、賄賂公行して、黄金を視ること主翁の如しと聞けり。華聖頓(註4)より今に至るまで、纔に百年なるに、乱離の弊も多かるは、堯舜禪讓の世界百余年間に聞かざる所たり。千百年を維持して弊なきを信じがたし。況や幾千万年といふ限りなき世界に於てをや。法蘭西の如きは、那拿崙(註5)が共和を主張して、君主独裁となりし始末あるならずや。羅馬帝塞薄爾(註6)も亦然り。共和制と君主独裁とは、其間に一髪を容るること能はざる結果ありしこと、一二もて数へがたし。是は国人智愚の齊からざるに由り、衆愚は全国を合すとも、人の豪勇に勝つこと能はざ

るがためなり。争<sup>いかで</sup>か人權同等の説<sup>ひと</sup>一を持して、智愚を同一に整理することを得ん。瑞西<sup>スイスイ</sup>の共和は實すべきが如きも、彼は小国にして、其制を<sup>あまね</sup>治くし易く、且鄰国の恐れあるにより、人心自然に鞏固ならざるを得ざる勢なり。斯<sup>しか</sup>る政俗なるを、泰西人が一般に賞したればとて、其に摸倣<sup>まうぼう</sup>して終に寸效を奏せざる結果なるを察せず。

我國の如き、礼を守り分に安んじて、開闢より今日に至るまで、同族一致し、宗室と共に安危を与にしたる国に試みんとするは、人情世態に昏く、自己あるを知りて、佗人あるを知らざる狂漢なり。目下に大乱を醸し、相互に屠滅するに先だつて、其身を天誅に容るるものに非ざるはなし。此輩の説を転<sup>カクワリ</sup>売<sup>（註7）</sup>し、各処に在りて喋々するものあるも、徒<sup>いたづら</sup>に人心を煽惑する<sup>（註8）</sup>に止まり、兄弟同志討して、兄弟は地獄に墮落すとし、己は天堂に升ると誇り顔に高く叫びつつ落命せんのみ。近年生齒<sup>（註9）</sup>日に繁く、国内にて生活しがたき勢なるも、強て減少しがたく、日に盜賊殺奪の盛なるは、真に惡むべき状態なれば、斯<sup>しか</sup>る争戦にても殺してんといはば、一理あるが如くなれど、其は人心あるものの言ふべき所に非ざるなり。殊に畏るべきは、此輩が国人の己に与せざるを遺憾とし、外客を誘導して、兄弟を攻滅するの策を講ずるものなしとせざるなり。深く寒心<sup>（註10）</sup>せざるべけんや。

— 註 —

- (1) 原文は「土」に作るが「土」に改めた。
- (2) 夏の激しい日光と秋の霜。刑罰・威令・節操などの厳しいこと。
- (3) 一定の生業についていること。
- (4) 一七三二—一七九九。アメリカ合衆国の初代大統領。在位は一七八九—一七九七。
- (5) 一七六九—一八二一。フランス第一帝政の皇帝。在位は一八〇四—一八一四—一八一五。
- (6) BC一〇〇—BC四四。古代ローマ共和制末期の政治家カエサル（シーザー）のこと。独裁体制を築こうとして暗殺された。
- (7) 「ウケウリ」のルビは岡本による。
- (8) おだててまどわすこと。
- (9) 人民・人口のこと。
- (10) おそれること。

IV

社会平權の説を実施し、国人をして尽く聖賢君子とし自主自由の身たらしめんは、不可なりといふに非ざるも、勢決して然ること能はざるものあり。況や邪説の無理なるもて、人心を強て己<sup>（註1）</sup>に従はしめんとし、嫉妬の心を逞<sup>たくまし</sup>くし、敢て紛擾を事とするに於てをや。国人をして各自に挙動して、手足を切断し、耳目を割裂し、一氣

の貫通するものなきが如くならしめんは、一日も国家を維持すべきものならじ。泰西に僅々たる註②大小国の平権制あるを羨みて、比隣なる露西亜の独断政制を問はざるが如くば何様の大変を醸さんも測りがたし。露国が政教を一致にし、自ら政教の主権者と称し、虚無党註③の毒螫註④を顧みざるは、国威を宣揚するに於て不便なるがためならずや。今日に在りて、此に遠慮する所なく、妄想の説を吐露するは、露人の奴隸となるを促すものなり。争いかでか大日本国独立の一丈夫と称することを得ん。

今日外人の我を侮弄する状あるものは露人に止まらず。我が国人たるもの、男女老稚を挙りて、死地に入りたる覚悟し、国家の命令あるを待たずて、武技を講習し、銃砲の私藏す可らざるものを格別とし、弓馬・劍槍・柔術・棒術・眉尖刀等の使用法等に精達し、陰に博奕註⑤を事とするの風を禁じ、陽に武術を競ひて利益を得るの俗を成し、精悍強毅なること、金鉄鏘々たる註⑥が如き体軀と為し、婦児といへども外客の侮りを受けざらしめて、彼が狼奔豕突の志を挫折せざばあるべからず。道德上より言へば、戦闘に楽しむを美德とするに非ずといへども、四海民心の斉からざるを奈にせん。一郷一県の公平を要するすら容易ならず。弱きを兼ね味きを攻め、生存に競争する今日にして、人心の一和を害することを

知らず、世人を愚なり文明に後れたりなどいひて、身を滅ぼし家を亡ぼすことを知らざるは、嘆ずべく悲むべきの至りならずや。露人は文明の公敵にして、平和の深仇と称する所なれば、万国の力を合して遏絶註⑦すべきものなるべけれど、平権同等の説を持して、君父を輕蔑し、米利堅一百年来の習慣を羨み、祖宗数千年来の大典を侮り、人心の決して和すべからざるを問はずとせば、一家も和せず、一村も和せず、一郡一県も和せず、終には全国を挙りて和せざるに至らん。此理は火を観るよりも明白なるものたり。果して然らんには、焉ぞ国人の力を合せて外国に当ることを得ん。焉ぞ外国と力を合せて露人を驅逐することを得ん。外国と力を合すといふが如きは極めて拙策なり。我は我が国力を合して外人を見ざらんことを要す。露人が各国に対すること、尤も巧に務めて国力を保聚せるは、各国の企及しがたき所なるべし。彼は虚無党の絶滅しがたきを患ふといへど、虚無党も国威を拡張するの精神を失はざるものに似たり。縦ひ一たび露兵を塵殺註⑧するに至ることありとするも、未だ安心しがたきものなきに非ざるべし。或は恐る。彼此なる社会党の相合ふに至り、彼が勢の敵すべからざるを見れば、彼を大統領と註⑨仰ぎ、大に我が国民權利の均からざるを声し、己が欲する所の自由を肆にするも

のあらんことを。思ひて此に至らば、憂国の精神あるもの、焉いづくんぞ一心の不平なるに任せて、舶来の妄説を喋々しやべすることを得ん。世の社会説を固執するものを見るに、率おほむね困乏を訴へて窮廬註10に悲嘆するものに非ざれば、志を当世に得ざるものなり。否いかずば泰西風の日に盛なるを目撃し、赤髯翁に媚びて、自己の地位を固くせんとするものなり。否いかずば邪教の小信小義を信じて、国家の大節を知らざるものなり。焉いづくんぞ忠孝の至性を保ち、生人の本分に安んずるものあるを得ん。彼輩は元来正気の餒うえたるがため、邪氣に崇たれたる者にて、邪を去れば赤々裸註11の人物となり、暫時も自持すること能はず。正義のため、屈服して悔悟するものあるも、動やもすれば極端の無神論を唱へ自由説を鼓煽註12するに至る。余毒の深き如何ぞや。彼輩は吾曹が窮廬に悲歎しながら、邪党に左袒註13せざるを見れば、時勢を知らざる頑陋漢とし、必ず英米諸国の人民が、衣食居住の富豊なる事実を挙げ、吾曹を生人の權利を放擲する者と嘲笑し、吾曹が異辞なきを見れば、社会の財産を共有するの策を講ぜしむるならん。富みは貴きと一致するものにて、必ず威権あり。米利堅にても一社の長となり、金銭の権あるものは、部下の投票を受くること多く、進みて議員となるの例あるに非ずや。富を子孫に伝ふることを許さずとするは、頗る難事

なるべく、子孫に伝ふるを制止しがたしとせば、必ず大地主等を生じて、威権もて其地を擅はしにするに至らん。君臣の名なしといへども、君臣の実ありといはざるを得ざるなり。顧おもふに米国の如きも数百年を経る間には、大に形勢の一変することあるべきのみ。孔子は「貧きを患うれへずして均からざる患うれふ註14」といへり。実に然ることながら、君道もて之を正すに非ざれば、整理しがたきものあり。社会平権等の説は、貧民が富人の權利を憤るに出て、己が立たんと欲して先づ人を立つといふものに非ず。安なんぞ富者を心服せしむることを得ん。真に平権を要するものは、忠孝仁義の道を治あくし、道德を純明ならしめて、徐おもむに其権の甚いたく偏するものを裁抑するに非ずば能はざるなり。審つまびらにせざるべけんや。

— 註 —

(1) 原文は「己」に作るが「己」に改めた。

(2) わずかなこと。

(3) 一九世紀後半のロシアにおける過激な唯物論者・革命家・無政府主義者・テロリストの総称。ロシア皇帝暗殺などの非常手段に訴えた。

(4) 害毒のこと。

(5) ばくちのこと。

(6) さかなさま。

(7) さえぎりとどめること。

(8) 皆殺しにすること。

(9) 原文は「ど」に作るが「と」に改めた。

(10) 貧しい住居のこと。

(11) 赤裸々に同じ。丸裸のこと。

(12) 鼓舞してあおること。

(13) 賛同し味方すること。

(14) 『論語』季氏に「孔子曰く「……国を有ち家を有つ者は、寡きを患へずして均しからざるを患ふ。貧しきを患へずして安からざるを患ふ。蓋し均しければ貧しきことなく、和すれば寡きことなく、安ければ傾くことなし。……」とある。

## V

吾曹は平權説の国家に害し一身を滅す結果あるを認むるがため、従ふこと能はざるも、一朝に富貴を得て長く国家に害なからしめば、争か左袒せざるを得ん。邪教の徒が文明を喋々する心は、真に了解しがたきものあり。忠孝仁義の風は日に衰へて、殺奪盜賊の習ひは月に盛に、事物の繁雜なるは、文縹(註1)とこそいふべけれ、文明といふべきに非ず。心思蕪雜(註2)にして學術支離すること、近年に至り、尤も甚し。縦ひ月世界に往來するの術ありとするも妖怪惡鬼のため束縛せられて、忠孝を度外にしたる精神に、生人の愉快を感じずることは万々あるべ

からず。世には外物の華美なるに誇り、市童の艶羨する(註3)を見て、大愉快とし、虚名を博し、權勢を銜ひて、一生の榮譽とする輩も多かるべけれど、芳原樓(註4)主人が生活の優なるは、八丈島民が人間の真味あるに何如と思はるるなり。今や各国互に華奢を競ひ、衣食に器械に、文明もて誇るといへど、道德の真快樂を保つに足るものなし。羅馬人が謂はゆる黄金世界といふものと何ぞ異ならんや。工商の事業を興し、外国に向ひて貿易し、理財の大權を擅にせんといふものあり。其は真に急務なりといへども、専ら争競を務めて他人の斃るを顧みず、一身の富貴を食りて外物の完備するに止らば、争か真の文明に進むことを得ん。是は錦に糞を包みたる世界にて、国家の元氣あるものといふべからず。斯くて安ぞ永久を維持することを得ん。斯る風なるは、英米も然り。法・独・奥・伊も亦然り。我國の如きも安ぞ然らずとすることを得ん。斯る精神にては、商工業の盛に起ることあらんにも、金錢をのみ崇拜する国柄となり、清・韓の模範となり、露人を圧倒するは、甚だ覺束なきことなるべし。或は恐る、往年北清の凶荒に、数万の金塊を腰にしなから道路に餓死したるものありたるが如き状況を呈するに至らんことを。兵糧儲蓄の法も講究せざるべけんや。



泰西人が物理・器械・技芸に長じたるは、已に聖域に達すともいふべきほどにて、一も間然す(註5)べきに非ざれど、形而上なる道学に至りては、経験もなく、習練もなく、稚童の域に徘徊するが如き者あり。甘徳(註6)の碩学なるすら、遠徳を認めたるに止まりて、道徳の命令に従ひがたく、生人の企て及ぶべからざるものとして、聖人が生知安行(註7)の趣あるを知らず。其国に古より一個の聖人なきがためなるべし。堯舜孔子の談などは、虚浮なりといはんにも、漢に黄叔度(註8)あり、宋に程明道(註9)あり、明に顔山農(註10)あり、我国にも藤原保則(註11)・中江藤樹(註12)・元淡淵(註13)等の諸子あり。或は聖人の体を具へて微なりともいふべく、或は聖人の体を具へたりともいふべくして、泰西の無き所たり。絶て無とはいふべからざる(註14)が如くなれど、謂はゆる善人の迹をも履まず室にも入らざるもの(註15)のみ。聖賢君子の道を学び得たるものならざれば、人倫の大節に於て模範とすべきものあるにあらず。蓋し上帝を万物に超えたるものとし、上帝に束縛せられて、牛馬の駕御に馴れたるが如くなるを極度とし、生人が道徳の大権は至誠に発し、流行の間に秩然たる条理ありて、互に相扶け相保するの事実なるを知らず。味噌と糞とを混同したる趣なるを、文明の尊重すべきものとし、泰西各国二三百年来の世界に

変化の頻数なるを認めて、彼此と註16吹聴するものなれば、結果といひ原因といふも、確乎たる見込みあるものとは思われず。泰西百科の学問は日に月に進むに相違なきも、往々に支離滅裂して、彼此貫通しがたく、一事起れば百事進むといふに似合はず。理化学の如きは、最も精密を極めたりと称する所なるも、医学と薬学との衝突あるを免れず。医師は率ね薬物の病を療する原因如何を知る者なしと聞けり。此説は余嘗て之を理化学の数人に質せしに、孰れも、歎息せる有様なりき。果して然らんに、理化学といへども未だ至極に達せざるなり。況や至誠もて求めど、経験習熟の功を積まざる忠孝仁義の学に於て安ぞ遽に喙を容れて喋々とすることを得ん。況や今日乳臭の少年子弟が、百科の学問に三五年の力を費したればとて、浅薄なること紙の如くなる智見もて、安ぞ遽に聖賢君子の道徳を妄議するを得ん。言論の自由なるは聖天子の賜にて、地天泰註17の運たるを賀すといへど、斯る情況なるを文明の事実と認むるは、吾曹の与しがたき所なり。吾曹をして率直にいはいしめば、謂はゆる修羅・天狗・餓鬼・畜生の境界を経歴しながら、統計表を作り呶々(註18)と論弁するものにて、謂はゆる「鬼と為り賊と為るの靦面目あり」(註19)といふの實際なれば、生人の大道に出でんは、今より幾百年を経歴し、邪説の

大害を的確に認めたる後ならんと思はるのみ。笑止千萬といはざるを得んや。

—註—

- (1) 飾りが過剰であること。
- (2) 物事が順序を失って乱れること。
- (3) うらやむこと。
- (4) 吉原の遊郭の主人をさす。
- (5) 欠点を指摘して非難すること。
- (6) 一七二四—一八〇四。ドイツの哲学者。『純粹理性批判』や『實踐理性批判』などの著作を残した。
- (7) 生まれながらに道を知り、心安らかに物事を行う聖人の境地。
- (8) 後漢の黄憲（叔度は字）。『世說新語』德行にもその名が見える。顔回の再来と言われた。
- (9) 一〇三二—一〇八五。北宋の学者程頤。王安石の新法に反対したため主に地方官を歴任したが、人望が厚く数々の治績をあげた。
- (10) 顔鈞。生卒年不詳。明代の陽明学者で、左派の王心斎の学派に属す。人間の性をありのままに肯定し、自らの性に従って自然に行動することを説いた。
- (11) 一二五—八九五。平安前期の官僚。太政官八省の丞を歴任した後、備中・備前の国司をつとめ、さらに要職を歴任。良吏として知られた。
- (12) 一六〇八—一六四八。江戸初期の儒学者で、日本の陽明学の祖とされる。近江聖人とも呼ばれた。『翁問答』などの著作がある。

(13) 一七〇九—一七五二。中西淡淵。本姓は秋元であることから、元淡淵とも呼ばれる。あらゆる事に通じ、折衷学を樹立した。

(14) 原文は「べかなる」に作るが「べからざる」に改めた。

(15) 『論語』先進に「子張、善人の道を問ふ。子曰く「迹を踐まず、亦重に入らず」とある。善人とは必ずしも先人の足跡を踐み行うわけもなく、また道の奥義にも達した者ではない、の意。

(16) 原文は「を」に作るが「と」に改めた。

(17) 『易』の卦の一つ「泰」。坤（地）と乾（天）よりなるので「地天泰」と言う。安泰を意味する。

(18) くどくど言うさま、やかましく言うさま。

(19) 原文は「為鬼為蜮有観面目」に作るが「鬼と為り蜮と為るの観面目あり」と書き下した。「鬼と為り蜮と為る」とは『詩経』小雅・何人斯に「鬼と為り蜮と為る、則ち得べからず」とあるのに基づき、陰険であることをたとえたもの。

## VI

邪教の徒が社会云々の説を<sup>ほしいまほ</sup>肆にするは、国家を亡ぼすの結果を<sup>すなは</sup>速にするに外ならず。此輩も均しく人なれば、幾分の人心あるべく、国家を亡ぼすことを欲するものとは思はざれど、悪鬼のため靈台<sup>か</sup>註しを侵蝕せられて、此に出づることを知らざるなり。斯る説を唱へて一身を犠牲にするを覚悟すと称するも、登天の階梯（註2）

とするに縁なきを知らざるは、慙笑す(註3)べきことの極みなりけり。

余は思ふ、強て社会平權等の説を唱へんとならば、其に先だつて宇内の兵權を無くすべし。何ぞ各大国に喻し兵器を一処に集めざるや。英・米・露・奥の諸国を始めとして、国中に寸兵を留めざることとし、宇内の数ヶ処に天討府といふを設け、大總管・大元帥の二員を置き、公法に従ひて征伐するものとし、漸く下民交際の際に公平を要するやうにしたらんには、幾分か其説の行はれ易きこともあるべきなり。此説は余嘗て之を拙著の『万国史記』(註4)に法蘭西の論に載せたることあり。近來著述せる『鉄鞭』(註5)には尤も審にしなければ、有志の細觀熟察せんことを祈るなり。されど宇内の各国は、君主と民主とに論なく、其国の協議に任せて、命令の嚴に行はるるやう經画せしむるに非ざれば、其民を保護すること能はじ。主道は専ら一國の安寧を保するに在り。斯道を貴びて命令を奉ぜしめんがため、其身も従つて貴くせざるを得ざるのみ。魔鬼に媚ぶるがため國民を強ひて従はしめたる者に非ざるなり。人物を扱ひて宰相大臣とするも、全く斯道を施行せしむるに在り。人主にして一二の過失あればとて、俄に動揺すべからざるは、祖宗に代はり道德を担当するの大責任ありて、小節を問ふべか

らざればなり。人民が父子・兄弟・夫婦・朋友の間に於ける模範は、尽く之を君に取るものにて、君の暴横ならんことを逆へ、君の過惡を責むるは、父母に向ひて善を責むると同じき結果を生じ、人の人たる大權を棄つるの患あればなり。況や人民が道を見るの一定しがたき、動すれば私論を主張し、智もて愚を欺き、強もて弱を凌ぐものあるに於てをや。米國の華聖頓は英人と和議を講ずるに當り、一般人民が忿怒して石を投じ己を殺さんとするを見ながら、敢て従はざりしことあり。共和の国すら此の如し。況や君主國の民たるもの、安ぞ一時意見の行はれざるを慨し、俄に君德を議することを得ん。且つ國事の成ることを宰相大臣に責むるは、古今各國の定例にして、政法の得失は宰相に帰すべきなれば、君位に対して人民の非難を容るることの逆徳たるを知るべきなり。宰相は固に其人を得ずばある可らず。是は臣民中より出でて君を輔佐する者にして、共和國の大統領と均きものなれば、君撰とするも民撰とするも、君の指定する所に従ひて然るべきのみ。君は道德を掌握する主權者なれば、臣民も道德もて君に事ふるの臣民たるべし。君の二あるべからざるは、数の一あるが如く、天の日あるが如し。民は益多きを國の幸福とせざるを得ずといへども、臣は君民の間に立ち上下を助くるものにて、民数の

多少に従ひ限りなしといふことを得ず。其位の漸く貴く君に近づくに及びては、漸く少なくなるを常とし、宰相は一国の智徳を挾びたるものなれば、一身もて君に代り民に代りて、諸臣を領率し其道を尽さしむるものたり。

一夫も其所を得ざる者あるは、己が罪たるを知り、務めて公平の政を施し、兼併豪奪の弊を除きて、国人の和輯せんことを要すべし。近来独逸諸国の小民が力を合して銀行を設け信用組合法を講じて、互に相利し相救ふが如きは、我より導きて奨励すべき所とす。是は君道に妨げなきのみならず即ち君道の然せざるを得ざるものたり。

国家の強弱は人心離合の処に存して、外形の文野(註9)と器物の豊儉(註7)とに關せず。焉ぞ人心に違ひて圧制束縛の制を勵行するを得ん。苟も心に愧づる所ありて、君民に対する面目なしとせば、一身を殺すとも罪を償ふに足らず。古今世界に匹夫の暗殺に遇ひたるもの多きは、此がためのみ。暗殺は君に対するの無礼なる沙汰の限りに非ざれど、身を挺(註8)でて(註8)決行し、自ら屠(ほふ)り死し、或は罪を君に待て、毫も他人を累(わづ)はさざるが如きは、君の決して動かすべからざるを認めたる精神に出たるにて、我國には尤も此輩を多しとす。是或は天地祖宗の然らしむるならんか。宰臣たるもの道義を外にし、億兆倚頼(註9)の念を絶ちて、一日も苟活す(註10)べき義あ

るを得んや。

臣民たるものは法律を守り道德に従ひて、互に相保安するを、君に事(つか)ふるの忠義を心得て、一日も忘るべらざるは勿論にて、共和政制の国といへども然らざるを得ざるものたり。子の父に事(つか)へ、婦の夫に従ひ、弟の兄に従ふも、君道の上より言へば均しく忠なり。之を子の父を訟へ、婦の夫に抗し、弟の兄に戻りて、同権を言ふものに比し、孰(いづ)れを取るべしとするや。正邪順逆の弁(し)は姑く舍き、利害得失に就きても、同権の利得たるを見ざるなり。一旦の利得はありとするも、其を計較する(註11)は極めて淺ましき鈍漢なり。斯る状態なるは、泰西にても深く歎ずる所にて、東洋人が父子恩厚く、父兄の情親(しん)きを養むものあるを聞けり。彼が性情に不快を感じたるがためなること彰々たり。況や上下の分嚴なる国に於てをや。漢土の革命もて俗を成せるすら君臣相保するならでは、国を成すこと能はず。其は父子・夫婦・昆弟・朋友の道も従つて立たず。相争ひ相害して互に其慾(ほ)を肆(しま)にするがためのみ。我國君民の如きは、一家宗族の如き關係あり。争(い)か革命の説を妄想することを得ん。學問進み才智長じて忠孝仁義の之を主宰するなく、社会平權説等の流行するに至り、盲宰相などありて其の説を信用するものあらんには、何様の大變を醸(か)さんも測りがたし。

深く敬虞(註12)せざるべけんや。

—註—

(1) 心のこと。

(2) 『旧約聖書』の「創世記」に記された「バベルの塔」をさす。

(3) あわれみ笑うこと。

(4) 明治一二年に出版された諸外国の歴史・風俗などを翻訳書に基づいてまとめた著作。中国でも読まれ、岡本の代表作の一つと言える。「天討府」に関する論は巻一「法蘭西記下の末尾部」に見える。

(5) 明治三四年に中国の上海商務印書館から出版された著作。ただし序文から三二年には完成していたと思われる。「天討府」に関する論は未確認であるが、巻四蔵編下天府にあるものと思われる。

(6) 文明と野蛮。

(7) 豊かなことと節約すること。

(8) 「挺身」に同じ。身を抜き出して進む、率先する。

(9) 依頼に同じ。

(10) なんとか生きながらえればいいといういかげんな態度を取ること。

(11) 利害をはかり比べること。

(12) うやまいおそれること。

## VII

漢土今日の勢は殆ど革命に近き模様あり。革命は彼国人心の安んずる所ならざるも、従来の弊習なるを奈に

せん。今日彼国の固陋なると輕薄なると怠惰にして且つ不廉恥なるとの如きは、真に厭ふべく慙むべき所なれど、是もて彼国を全く為すこと能はずとし、野蛮視するは、大なる盲目漢といはざるを得ず。自己は禽畜にも劣れる習慣もて性を成し、君父あることを知らざる身にて居ながら、他人が面目の見苦しきを呶々するは、娼婦か守銭奴を鑑定するが如き誤りなしといふべからず。漢土の今日は実に道ふに足るものなしといへども、父子君臣の道を知るものなしといふことを得ず。此道を發揮して能く其民を鼓舞作興するものあらんには、今日の弊習を一洗して、全国の人心を一致にし、数十万の精兵を三五年に養成し、五洲世界に向ひて雌雄を争はんも、甚だ難事に非ずと思はるるなり。泰西異端の徒が上帝云々の妄論の如きは、一朝にして掃蕩する(註1)に足るものあらんか。我國に於て骨肉兄弟として、最も価値あるものは此国に如く(註2)ものなかるべし。此国と共に君臣の道德を明にし、四海五洲の君臣をして、各其道を尽くし、万民をして平安ならしむるは、我國の大任にて全国人民の深く講究すべき所なるべし。邪教の徒が無頼漢・薄命児を誘惑して同胞兄弟とし、其をして躍起せしめたる意外の結果として現出したる米利堅・瑞西の二国を主張して、君臣父子の大倫を滅却することを忘れたる狂漢などに對

し、耳目を注ぐべきに非ざるなり。

漢土は今日の道ふべからざるに至れども、往古に溯

れば五洲に卓冠したる聖賢君子の国たり。英人が遺伝説にして少しく道理あるものとせば、争か一人の与に語るべきものなしとして、深く輕侮することを得ん。況や我國の彼に於ける唇齒の相保するが如く輔車の相依るが如きもの(註)あるをや。野蠻なり衰弱なりとて高処に見物すべきに非ず。邪教の徒が社会平權云々等の説を他國に実試せんとするは、馬何默教徒の狂頑なるものあるを知らず、大乘仏徒の大胆なるものあるを知らず、孔子の道義もて五億の人民を一致したるものあるを知らざるなれば、深く患ひとするに足らざるが如くなれど、五億の人民にして斯る輩の毒を流すものあり。これら流行の感なきこと能はず。安ぞ道義を明にして之に棄せざるを得ん。顧ふに万民の教学は国家の大基本なれど、一時の急を救ふは政法の形迹もて改正するに如かず。今日に當り漢土の政体を改革して我國の文運を促すべきものは、何もて最急務とすべきか。務めて革命の患なからしむるこそ真の急務といふべけれ。されど余が革命なからしむるの説は大に俗論と異なるものあり。余嘗て漢土のため熟思するに、孔子を立てて、即真文宣皇帝とし、夫子の子孫をして帝位に即き、万世に伝へて変ずることなきも

のとし、其祿は今日に止りて多きを要せずとするも、神天に誓ひて大憲法を定め、之を掌握して漢滿両国及び西藏・蒙古の各国に君臨せしめ、清帝は第二等の皇帝となり、孔氏と同じく万世に変ずることなきものとし、其祿は孔氏に三五倍する程を領し、全国を幾分へば直隸・山東・山西・河南、及び東三省・蒙古部を一国とし、江蘇にし、暨浙江・安徽・湖南・湖北を一国とし、福建・広東・広西・貴州を一国とし、四川・陝西・西藏等を一国とするが如くにして、各国に總管を置き、其地の豪傑にして徳望高きものを択びて總管に任じ、在職五年もしくは十年を一期として易ふるものとし、子孫に伝ふることを許さず。其祿は清室にも倍するほどにし、大憲法を奉じて政を為し、互に相競ひて革新を図らば、大に今日の頽勢を挽回することもあるべきか。余は、二十年前より此説を持し、窃に其説の易ふべからざるものたるを信ぜり。

總管の制は泰西連合諸国などの法に則りて種々なるべけれども、命令の嚴に行はるるならでは功効を奏することも難かるべければ、孔孟が君臣の説は決して動かすべからざるものたるべし。蓋し總管は君に代り君の及ばざる所を助くるものなれば、君道の一分ともいふべきものにて、道徳を基本とせざるを得ざるなり。君道は道徳の盛なるに在りて、身分の貴きに在らず。身分の貴きは、道徳の盛なるより生じたるにて、人民

たるもの道德の違ふべからざるを知れば、君身に対して擬議する所あるを得ず。蓋し神聖の道は道を万物の表に求むることを要せず。父を見れば父の道ありとし、君を見れば君の道ありとするがために、君父の過失を咎めず。君父の過失は我が力の及ばざるがためなりと反省し、君父を善に導くことを忘れざればなり。是は一人国に對するも然らざるはなし。道德は人を咎むるを旨とするものならざるがため、政教を一致にして毫も妨げなきものなり。欧羅巴人が政教各別の説は謂はゆる分業の見より、羅馬教王が政界に跋扈し、各国人主が教権に干渉して、争乱の絶へざる弊を慮りたるに起りて、一時の爲に言はば、間然する所なきが如くなれど、万世通行の論とは爲しがたきものなるべし。蓋し此制は法律を先にし、道德を後にしたるにて、人主の賢愚を問はざるは、猶可なりといふべけれど、道義の君身に属するを認めず。政を爲すものは必ず暴横なるものとし、法律もて压制したるものにて、君身の善悪は庶民の間ふ所に非ざるも、法律に違ひては毫も其欲する所を肆にすることを得ざらしむ。是は君主を木偶視するものにて、暴人を予防するに便なれども、私行の邪惡を奈ともするなく、人民の模範としがたきものを行ひながら、人民は取りて模範とし、毫も回顧せざるの結果あり。人民たるものも君の私行を諫止するの責なく、自ら其身を処するにも、法律の間ふ所に非ざる以上は、何事を爲すも妨げ

なければ、月俸の多きを幸に、酒池肉林に出没し、声妓を擁し淫行を縱にし、覲然(註4)と恥づる所なくして、陰に大毒を流すの罪たるを知らず。人民の自主を促す以上は、吾曹が先導して旧習を一掃すべきなりといふものの如し。思ふに人権同等の説に出で一般世人を認めて聖賢君子となるべきものとしたるならんか。道德の内省自反に本づきて進修を忘れず、忠恕もて他人に接するは、四海人民の均しく由りて共に安んずべき所なるを知らず。法律の習慣に従へるものと、時勢に随ひ變化して窮りなきものを見て、億兆が安心立命の地と爲さんとす。争か永世に伝へて弊なきを得ん。今日我国人心の浮薄にして品行の情落せるは、全く政教各別の説に淵源するものに非ざるを得んや。孔子の語に「上に好むものあれば、下は焉より甚だしきことあり」(註5)といへるは、極めて格言なれど、今の学者は定めて冷笑するもの多かるべし。英國の巷爾治四世(註6)が淫行を縱にして挙國に方正の人なく、品行怠惰なること言ふに忍びざるものあり。今日、女王(註7)の夫布倫士が、徳義を講し風記を修したるにて、酔飽狼藉の風も變じて質樸高尚の行となりたる事実あるに拠れば、泰西人も道德の政要たるを知るべき筈なるに、敢て然りといはざるものは、道德を教法に帰し、誓つて之を教門に譲与し、政界より干渉すべきものに非ずとしたるがため、敢て喙を此に容ざるならん。或は政權の終に教權に如かざ



るを歎ずるものもあるべく、或は教権の盛なるを謳歌し、政権を廢して一に教権に帰せんと企つるものもあるべきなり。斯る政俗なるを我國に施し、一もなく二もなく違ふべからず（註8）とし、祖宗が安平の訓と、孔子が仁義の説とを併せて、邪教に同じものとし、大政の基本としがたしといふが如くならんには、安ぞ政を為して泰平を保つことを得ん。今や社会平権・人民平等の説にして大に行はるとし、道義を政法の管知する所に非ずとせば、生人に君父なしと認むるものと何ぞ異ならん。父は君と異なりと説くも、上帝の恩は父母に百倍すとの説あるに至れるを見れば、父の軽きこと知るべし。斯くは何等の人に對しても輕からずといふものあるべからず。之を要するに、道義は生人至誠の精神に発して、神人を一致し万古に流行して易ふべからざるものなるを、此輩は之を妖怪惡魔の主宰する所にして、生人の関与することを得ざるものとし、君父を己と同じき肉体なれば、深く敬礼すべきものに非ずとし、耳は聴くことの職あれば、目の視ることに關せず、手は持つことの職あれば、足の行くことに關せずといふが如き、支離滅裂の見を固執して、生人の大道を擾乱するを忘れたる者なり。是豈亞細亞の存亡に關するものならずや。我國の存亡に關するものならずや。果して然らば東洋の人種は亂離の間に死し尽くすに至らん。斯くて邪教の徒は大権を占め得たりといはんか。甚だ覺束なきことなるべし。是は直に宇

内の存亡に關するものたり。深く戒めざるべけんや。

—註—

(1) 原文は「ず」に作るが「す」に改めた。また「掃蕩」ははらい除くこと。

(2) 原文は「ける」に作るが「く」に改めた。

(3) 唇齒輔車。互いに助け合う關係にあること。

(4) あつかましいさま。

(5) 『孟子』滕文公上に「孔子曰く「……上、好む者あれば、下、必ず焉より甚だしき者あり。……」とある。また『礼記』緇衣に「子曰く「下の上に事ふるや、其の令する所に從はずして、其の行ふ所に從ふ。上、是の物を好めば、下、必ず焉より甚だしき者あり。……」とある。

(6) イギリスのジョージ四世（一七六二—一八三〇、在位一八二〇—一八三〇）のこと。原文は「五世」に作るが「四世」に改めた。五世の在位は一八二〇—一八三六で、岡本の死後となる。「ゼオルジ」のルビは岡本による。ジョージ四世は青年期にカトリック教徒の女性とひそかに結婚するなど、不品行がしばしば問題となった王で、即位語も正妃キャロラインとの離婚問題などで世論の非難をあびた。

(7) イギリスのビクトリア女王（一八一九—一九〇一、在位一八三七—一九〇一）と、その夫アルバートをさす。女王はよき妻として、夫は女王のよき協力者として、一八四〇、五〇年代に政党制の混乱した時代をよく治めたとされる。

(8) 原文は「べかず」に作るが「べからず」に改めた。